

「神の子ども」

ヨハネの手紙第一

3:1~10

はじめに

今日は「神の子ども」というタイトルをつけていますが、ヘブル語で子どものことをベーン(בן)と言います。家を象り「家族、国、国民」を意味する文字ベート(ב)と、魚を象り「増える、広がる、祝福される」ことを意味する文字ヌーン(נ)が合わさった言葉で、つまりベーンとは、「家が増える、国が拡大、繁栄する」ことを指し示す言葉であると考えられます。まさに子どもがいる家庭、国家には未来の希望があるとされる通りです。しかしその子どもがどのように育つかが重要です。確かに良い子どもであれば、その家、国にとって繁栄と祝福をもたらしますが、逆に子どもが悪ければ、苦しみと滅びをもたらすことになってしまいます。神は私たちをご自分の子として扱い、神の国の繁栄のために、もちろん良い子に育てようとしておられます。ではその良い子とは、「神の子ども」とはどのような存在なのかということ、今日の箇所から考えてみたいと思います。

1. 御父の愛

【新改訳改訂3】

I ヨハネ

3:1 私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです——御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょうか。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。

私たちはみな「神の子ども」とされています。それは同時に神が私たちの親、「御父」となってくださることを意味します。ですから神の愛とは、夫婦や恋人などの男女間の愛ではなく親子愛、父が子を愛する愛であると言えます。ヘブル語でこれをアーハヴ(אהב)と言い、創世記 22:2 でアブラハムがその息子イサクを「愛している」という箇所にその起源があります。アブラハムにとってイサクは大切な一人息子、後継ぎというだけでなく、神が彼の後の子孫のために与えられた、永遠の契約を指し示す存在でした。

【新改訳改訂3】

創世記 17:19 すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」

ですからアブラハムはイサクを愛したというよりもむしろ、神の永遠の契約を愛したのであり、そしてその永遠の契約とは、彼を大いなるものとし、彼によって地上のすべての民族を祝福するというものです。

【新改訳改訂3】

創世記

12:1 【主】はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるもの
としよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民
族は、あなたによって祝福される。」

愛する、アーハヴという言葉は、神を表す文字アーレフ(א)と、窓を象り「目、見る」ことを意味する文字ヘー(ה),そして家を象り「家族、国、国民」を意味する文字ベート(ב)が組み合わさったものであり、「神が見る、目を留める家、国」という意味があると考えられます。神の見る国「神の国、御国」とは、アブラハムとその子孫、すなわちイスラエルの民、ユダヤ人を通して祝福され、繁栄する国であり、愛する、アーハヴとは本来この「神の国、御国」に目を留めること、そのご計画に視点を置いた行為、考え方、生き方のことであると言えます。神が私たちの「御父」となってくださったと述べましたが、この「御父」という言葉自体が、ヘブル語でアーヴ(אב)と言い、「神」アーレフ(א)とベート(ב)「家、国」という文字の組み合わせであり、「神の家、神の国」という意味を持っているのです。このように、ヘブル語で見るならば、「御父」の与えてくださる愛とは、アブラハムに与えられた永遠の契約に基づく「神の国、御国」のことであり、私たちをその後継ぎ、相続する者としてくださったということが「私たちが神の子と呼ばれる」という言葉の、具体的な意味であると考えられます。筆者であるヨハネは、これについて「御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょうか。」と表現しています。一般的な、人間的な愛は全て一時的であり、しかも不十分、不完全です。たとえ命をかけるような、犠牲的な愛の行いであっても、その対象を永遠に、完全に救うことはできません。しかし「御父」アーヴの「愛」アーハヴは、私たちを永遠に守り、保ち、ともにいて下さる「神の家、神の国」に、「神の子」として招き入れて下さるとの特権です。これ以上の愛が果たして存在するのでしょうか。いやこれだけが、これこそが愛であると言えるのではないのでしょうか。

2. 知る

そして「世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。」と続けられています。ここで「知る」と訳されているヘブル語はヤーダ(יָדָע)と言い、その本来の意味が創世記 3:5 の中に示されています。

【新改訳改訂3】

創世記 3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

これは蛇となった悪魔が、エバを誘惑した時の言葉ですが、ここで「善悪を知る」と訳されている部分に聖書で最初のヤーダが記されています。このように、ヤーダ「知る」とは本来「善悪を知る」、すなわち何が正しく、良い事で、何が悪で、間違っているのかということを知っている、理解している、つまり区別し、判断できることを意味していると考えられます。つまり「世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。」とは、世の人々は、「御父」が正しいのか、それとも間違っているのかを知らないということになりますが、この「御父」と訳されたヘブル語アーヴが「神の家、神の国」を指し示していると述べました。ですから世の人々は「神の国、御国」が善であるのか悪であるのかを知らないという

ことであり、またこの神のご計画が正しいものなのか、偽りであるのかを世の人々は区別、判断することができないという意味に捉えることができます。ちなみに聖書が提示する「善」とは、神に正しい、良しと認められ、受け入れられるもののことであり、「悪」とはそれ以外の全てを指します。創世記 3:5 で「善悪を知る」ことを「目が…神のようになる」とも言い換えています。つまりヤーダ「知る」とは、物の見方が神と同じになる、神と同じ視点を持つことを意味し、神の思考、価値観を持つことであると言えます。ですから逆に「御父を知る」とは、「神の家、神の国」を神と同じ視点で見る、神と同じ思考で捉えることであり、神のご計画を神と同じ視点で、まさに「善」、良い、正しい見方で理解することであると言えます。

3. 後の状態

3:2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

「神の子ども」とされた者の「後の状態」について述べられています。それはまだ完全には明らかにされてはいませんが、いくつか解っていることがあります。それはまず第一に、この「後の状態」とは「キリストが現れる時」つまりイエシュアが再臨される時に、私たちに起こる状態のことであるということです。つまりイエシュアが再臨されるまでは、私たちの外見も内面も、大きな目立った変化はないということです。よく神を信じたのに、何の変化も感じないと言う人がいます。教会に通い、聖書を読み、祈っているのに、同じ罪を繰り返したり、恐れたり、不安になったりする自分に失望する人は少なくありません。しかし私たち「神の子ども」が変えられるのは、イエシュアが再臨される時であって今ではありません。たとえ「神の子ども」とされてもイエシュアが再臨されるまでは、私たちはみな弱い愚かな罪人の状態にあるということです。そして第二に「後の状態」とは、「キリストに似た者となること」であるということです。その理由は「キリストのありのままの姿を見るから」と述べられています。イエシュアの「ありのままの姿」とは、十字架にかけられて死んでしまうような身体ではなく、復活の身体、もはや弱くとも老いることもない永遠の身体であり、更に王の王、主の主、神の御子としての本来の立場、姿のことであると考えられます。この御姿を「見る」ことによって私たちはついに変えられるのですが、この「見る」という言葉はヘブル語でラーアー(לָרֹא)と言い、ただそれだけを選び出して目を留め、他には目もくれないという意味です。

【新改訳改訂3】

創世記

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

これはラーアーが聖書で初めて使われた箇所です。神は光を呼び出し、これを良しとされ、受け入れられました。神は光との交わり、関係を持たれました。しかしやみは区別して目を留めず、ただ光だけに目を留められました。私たちが「神の子ども」としてイエシュアの本来の姿を「見る」時、それはイエシュア

だけに目を留め、他には一切目を奪われない者になる、変えられるということです。それが私たちの「後の状態」であるということであり、今明らかにされている情報の一部です。

3:3 キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。「キリストが清くあられるように、自分を清くする」とは、先ほどの「キリストに似た者となる」という言葉が言い換えられて強調されているものと考えられます。つまりこれも「後の状態」のことであり、イエシュアが再臨された時に私たちのうちに現れる変化であると考えられます。ちなみにここで「清く」と訳されているヘブル語はターヘル(טָהַר)と言い、これが最初に使われている箇所、神のご計画を見ることができます。

【新改訳改訂3】

創世記

35:1 神はヤコブに仰せられた。「立ってベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウからのがれていたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。」

35:2 それでヤコブは自分の家族と、自分といっしょにいるすべての者にとり言った。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、着物を着替えなさい。」

35:3 そうして私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこで、私の苦難の日に私に答え、私の歩いた道に、いつも私とともにおられた神に祭壇を築こう。」

これは神がヤコブすなわちイスラエルに対して「ベテルに上り、そこに住みなさい」と命じられた場面です。ここで「身をきよめ」という部分にターヘル本来の意味があります。「ベテル(בֵּית־אֵל)」とは「神の家」という意味であると以前述べました。このようにターヘルとは、「神の家」に住むこと、神に祭壇を築くことを指し示していると言えます。私たちが「キリストに似る者」とされるとは、同時に「神の家、神の国」に住む者とされるということであり、そこで神に祭壇を築き、神に礼拝をささげる者となるということが、この「清くする」と訳されたターヘルという言葉に表されていると考えられます。

4. 罪

3:4 罪を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。

「罪を犯す」ことをヘブル語でハーター(חָטָא)と言い、本来は神のご計画を知らない、知らされていないがために犯す過ちのことであり、その過ちとは神のご計画を阻害しようとする行為であると考えられます。

【新改訳改訂3】

創世記

20:1 アブラハムは、そこからネゲブの地方へ移り、カデシュとシュルの間に住みついた。ゲラルに滞在中、

20:2 アブラハムは、自分の妻サラのことを、「これは私の妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、使いをやって、サラを召し入れた。

20:3 ところが、神は、夜、夢の中で、アビメレクのところに来られ、そして仰せられた。「あなたが召し入れた女のために、あなたは死ななければならない。あの女は夫のある身である。」

20:4 アビメレクはまだ、彼女に近づいていなかったのです、こう言った。「主よ。あなたは正しい国民をも殺されるのですか。」

20:5 彼は私に、『これは私の妹だ』と言ったではありませんか。そして、彼女自身も『これは私の兄だ』と言ったのです。私は正しい心と汚れない手で、このことをしたのです。」

20:6 神は夢の中で、彼に仰せられた。「そうだ。あなたが正しい心でこの事をしたのを、わたし自身よく知っていた。それでわたしも、あなたがわたしに罪を犯さないようにしたのだ。それゆえ、わたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。」

ゲラルの王アビメレクは、アブラハムの妻サラを自分の妻にしようとする。アブラハムがサラは自分の妹だと言ったためです。神の介入「あなたがわたしに罪を犯さないようにした」、がなければ、神が真実を告げなければ、アビメレクは危うく罪を犯すところでした。もしサラがアビメレクの妻となれば、神のご計画、神がアブラハムに約束されたことが成就しません。

【新改訳改訂3】

創世記 17:19 …神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」

このようにハーター「罪を犯す」とは本来、神のご計画を阻害する行為を指し示していることが解ります。そして罪とは「不法」であり、「律法に逆らう」ことだと述べられていることから、神が定められた法、律法とは、一般的に捉えられている禁止や命令に関する事項という類のものではなく、神のご計画であり、神がアブラハムとその子孫に与えられた約束「永遠の契約」についてのことであると言えます。

3:5 キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。

イエシュアは「罪を取り除く」ためにかつて来られ、そして再び来られる御方です。ハーターが示すように「罪を犯す」ことが神のご計画を知らないがために起こることであるならば、これを「取り除く」には、その神のご計画を疑いようのない事実として実現させるほかありません。キリストすなわちメシアであるイエシュアは、神のご計画を寸分違わず、完璧に成し遂げる、実現させる御方です。それが「キリストには何の罪もありません。」という意味だと考えられます。この事から次の事が言えます。神のご計画は、「罪を犯す」私たち人の手によって実現されるものではないということです。神のご計画を知らない、知らされていない者に、それを完成させることなどできないという当然の理屈です。何の罪もない御方、すなわち神のご計画を完全に知っておられる、理解しておられるイエシュアだけが、これを実現させることができるという事です。

5. とどまる

3:6 だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。

罪を犯さない御方、つまり神のご計画を完全に理解しておられる御方、キリストによって、メシアであるイエシュアによって、神のご計画は成就、完成します。ですからこの御方の「うちにとどまる者」は、神のご計画を知る、理解するということです。ではイエシュアの「うちにとどまる」とはどのような事でしょうか。ヘブル語でこれをアーマド(אָמַד)と言います。その最初の記述を見てみましょう。

【新改訳改訂3】

創世記

18:1 【主】はマムレの櫪の木のそばで、アブラハムに現れた。彼は日の暑いころ、天幕の入口にすわっていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。彼は、見るなり、彼らを迎えるために天幕の入口から走って行き、地にひれ伏して礼をした。

18:3 そして言った。「ご主人。お気に召すなら、どうか、あなたのしもべのところを素通りなさらないでください。

18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、それに、料理した子牛を持って来て、彼らの前に供えた。彼は、木の下で彼らに給仕をしていた。こうして彼らは食べた。

ここでアブラハムが三人の神の使いを大歓迎してもてなし、彼らに「給仕して」という部分に聖書で最初のアーマドが使われています。このようにアーマドとは本来、神を喜び迎え、仕えることを指し示していると考えられます。ですから「キリストのうちにとどまる者」とは、イエシュアの再臨を喜び迎える者であると言えます。またアブラハムが「日の暑いころ」であるにも関わらず、「天幕の入り口に」座っていた事から、彼が神の来られるのを待ち望んでいたと捉えることができます。アブラハムのように「永遠の契約」、神のご計画を信じ、そしてイエシュアが来られるのを待ち望む者、そしてイエシュアが再臨されるその時、イエシュアの傍らにあって仕える者、それが「キリストのうちにとどまる者」であると考えられます。一方キリストを「見る」ことも「知る」こともない者とは、ヘブル語の視点で捉えるならば、神に目を留められない者、そのご計画を知らない、知らされない者のことであり、創世記 1:4 で光と区別されたやみのように、「キリストのうちにとどまる者」とは全く関わりのない者、すなわち神との関わり、交わりのない者のことであると言えます。

6. 正しい

3:7 子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです。

「だれにも惑わされてはいけません。」とありますが、ここでは「義を行う者」である「神の子ども」たちは、イエシュアと同様に「正しい」者であるという事実から目を逸らしてはならない、忘れてはならないという事だと考えられます。ここで「義を行う」また「正しい」と訳されているヘブル語はどちらもツァッディーク(צַדִּיק)で、創世記 6:9 で最初に使われた言葉です。

【新改訳改訂3】

創世記

6:9 これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

6:22 ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った。

ツァッディーク「正しい」人とは、「全き」人そして「神とともに歩む」人、すなわち「すべて神が命じられたとおりにし、そのように行う」ことであると言えます。ここに記されている人物ノア(נֹחַ)は、「憐む、慰める」という意味のナーハム(נָחַם)という言葉から名づけられました。ですからノアの正しさは、彼自身の性質、性格というよりもむしろ、暴虐に満ちた滅びるべき地上に対する神の憐み、慰めとして与えられたものであると考えられます。ですから私たち「神の子ども」は、自らの行いや業で正しい者とされるのではなく、ただ神の憐み、慰めによってキリストの正しさ、イエシュアと同じ正しさを与えられるということであり、それ以外の方法や業によって得られるものではないから「だれにも惑わされてはなりません。」と述べられているのだと考えられます。

7. 悪魔

3:8 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。

「罪を犯している者」とは神のご計画を知らない者、阻害する者であると述べました。悪魔とはまさにその象徴、元凶たる存在です。悪魔は神のご計画に対して「初めから」反対しているのです。なぜなら神のご計画とは、この地上に「神の家、神の国」を建てるために、この地上の悪魔と悪魔から出た者を「打ちこわす」、滅ぼす計画でもあるからです。もしそうでなければ、悪魔が神のご計画に逆らう理由がありません。神は悪魔を滅ぼそうとしているからこそ、悪魔は無駄な努力と解っていても、必死に抵抗しようとしているのです。

8. 神の種

3:9 だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。

ですから逆に「罪を犯さない者」とは、神のご計画を知らされ、それを信じて待ち望む者のことだと考えられます。そしてその人のうちには「神の種」が「とどまっている」と述べられています。種とは木や草などの植物に生じるものですが、神はこれを「地の上に芽生えさせよ」とお命じになりました。

【新改訳改訂3】

創世記 1:11 神は仰せられた。「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ。」そのようになった。

このように種とは、天ではなく「地の上に」芽生える、生きるものの象徴であると言えます。なぜなら神は天地創造の御業において地を創られた後、最初に地の上に生きるものとされたのがこの「種を生じる」

植物であったからです。ですから種とは「地の上」に生きることを指し示していると考えられます。また「とどまっている」と訳されているヘブル語はシャーアル(שָׂרָא)と言い、大洪水を生き延びたノアについての記述で最初に使われた言葉です。

【新改訳改訂3】

創世記 7:23 こうして、主は地上のすべての生き物を、人をはじめ、動物、はうもの、空の鳥に至るまで消し去った。それらは、地から消し去られた。ただノアと、彼といっしょに箱舟にいたものたちだけが残った。

「ノアと…箱舟にいたものたちだけが『残った』」という箇所にも最初のシャーアルが使われています。このように、シャーアルとはこの地上において滅びを免れて生き残るという意味があると考えられます。つまり「神の種」が「とどまっている」者とは、神のご計画がこの地上に現わされるものであるということ、すなわち「神の家、神の国」はこの地の上に建てられるものであり、「神の子ども」たちは、この地上に生きる者とされるということが指し示されていると考えられます。

3:10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。

イエシュアがこの地上に再臨される時、「神の子ども」たちはこの地上に生き、悪魔と悪魔の子どもたちとはこの地上から追い出され、滅ぼされるのです。この出来事以上に「神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきり」とする結果があるでしょうか。天と地を創造された私たちの神は、光とやみを区別し、空と海を分け、海と陸の境を定め、全ての生き物をその種類に従って分け、人を男と女に造られた、「はっきりと区別」される神です。そしてこの神のご計画は、「神の子ども」を救い、「悪魔の子ども」を滅ぼし、「はっきりと区別」すること、すなわち裁くことで完成、完了します。私たちは「神の子ども」としてこのご計画を理解し、これに同意し、信じて待ち望む者として今を生きることを求めましょう。

【新改訳改訂3】

マタイの福音書

6:9 『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。』

6:10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。